

機関番号：11301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19730102

研究課題名（和文）初期近代ヨーロッパの絶対主義政治理論における古代政治学の継受の問題

研究課題名（英文）Absolutism and Ancient Political Thought

研究代表者

犬塚 元（INUZUKA HAJIME）

東北大学・大学院法学研究科・准教授

研究者番号：30313224

研究成果の概要（和文）：本研究は、絶対主義政治理論と古代の政治学の関連の様態を分析することを通じて、絶対主義政治理論は人文主義の延長線上に位置づけられる、との思想史理解を研究成果として獲得した。これまで国内外の通説的理解では、人文主義は、政治的人文主義を媒介にして共和主義と関連づけられ、これらの思想潮流に対する批判こそが絶対主義政治理論である、と論じられてきた。しかし本研究は、初期近代とは人文主義的な思想態度が一般化した時代である、というばかりでなく、絶対主義政治理論もむしろ人文主義の正統な継承者のひとつである、との思想史的事実を析出した。

研究成果の概要（英文）：This research has uncovered the historical continuity between humanist thought and absolutist political thought in the early modern Europe. Against a historical understanding that humanism was the ideological origin of republican political thought, this research showed that the absolutism also could be interpreted as one of the genuine heirs of humanist thought.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,300,000	690,000	3,990,000

研究分野：政治学史・政治思想史

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：絶対主義、人文主義

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、ヨーロッパの政治思想史における古代ギリシア・ローマ世界の政治学の継受という問題領域について、特に初期近代の絶対主義政治理論に注目して、その継受の様態を解明したものである。

本研究の背景としては、古代の政治学の継受、ならび絶対主義政治理論、のそれぞれについての研究状況を研究背景として挙げることができる。

(1)ルネサンス以降のヨーロッパの政治思想の多くが、古代世界の政治学を受容してきたことは、政治思想史学における基本的理解のひとつとなった。しかし、その受容の歴史的様態については、必ずしも詳細な分析が存在するわけではない。共和主義研究はこの点をめぐる近年における研究の代表だが、その成果が典型的に示すように、古代の政治学の内実についても、近代におけるその受容についても、単純化・図式化された理解が支配的であった。

(2)他方、絶対主義政治理論をめぐっては、1990年代以降、リヴィジョニストの研究成果を前提にして、立憲主義との関連をめぐって研究が進展した。しかし、ここに生じた論争においても、絶対主義と立憲主義のあいだでは古代の政治学をめぐる解釈が重要な争点のひとつであった、という点には必ずしも注目がなされてこなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパの絶対主義政治理論を対象にして、古代の政治学を受容の様態を解明することをめざした。このなかでは、第一に、古代の政治学との関連を糸口にして、初期近代の絶対主義政治理論の多様性と共通性を明らかにすることを通じ、この思想潮流の思想史的位置を確定すること、第二に、古代の政治思想との関係を手がかりにして、ヨーロッパの政治思想史の見取り図の再検討を行うこと、が目的であった。

## 3. 研究の方法

(1)本研究課題における具体的な分析作業の中心は、絶対主義政治理論の思想家がみずからの絶対主義理論を提示するにあたり、古代の政治学をどのように取り扱ったか（どの思想家の、どのテキストの、どの箇所を取捨選択し、それをどのように理解・解釈して、どのような態度を採ったか）という点について、テキストに直接的に明示された言及・典拠を手がかりにする手法によって解明することであった。

(2)それと同時に、絶対主義政治理論（における継受）の特質を解明するためには、隣接ないしは競合・敵対したそのほかの政治理論の系譜（立憲主義、共和主義、啓蒙思想）について同様のアプローチに基づく分析をおこない、これらと絶対主義政治理論を比較対照する方法を採用した。

## 4. 研究成果

(1)①本研究の分析作業を通じて明確になった最大の成果は、絶対主義政治理論は人文主義の延長線上に（ないしは、その一つの変種として）思想史上の位置を与えられる、という知見であった。人文主義について、政治的的人文主義というバージョンを媒介にして共和主義と短絡させる国内外の通説的思想史理解は、人文主義についての思想史見取り図として一面的であるばかりか、絶対主義政治理論と古代の政治学との関連をめぐるとして不適切である。政治思想史における

初期近代とは、人文主義的な方法・思想・態度が人口に膾炙した時代である、というだけではない。それだけにとどまらず、ボダンやホブズに即する限り、絶対主義政治理論は、むしろ人文主義の正統な継承者ですらある、と資料に基づいて指摘することが可能である。これは、従来の政治思想史理解に大幅な修正を迫る知見である。

②この点に関連する各論的な研究成果としては、第一に、初期近代の絶対主義政治理論が利活用した古代政治学の具体的なテキストとして特にクセノフォン『キュロスの教育』の重要性が明確になった。

③関連する各論的な研究成果として第二に指摘できるのは、上記の知見はホブズ研究の文脈のなかでは以下のように表現できる、との点である。ホブズの政治思想は、人文主義から（幾何学に向けての）離脱したのではなく、全体としてあくまで人文主義のひとつの成果・帰結として位置づけられる。（近年の優れた研究が示すとおりである）。

④そのうえで、本成果をふまえて、人文主義の文献学的方法と歴史意識が、絶対主義政治理論として結実するに至る内在的過程・歴史過程については、さらなる分析を蓄積する必要があることが浮き彫りになった。この点をめぐる近年の思想史学における仮説は、ストア主義の復興と懐疑主義を媒介として説明を試みているが、この仮説は、絶対主義政治理論の一切を必ずしも説明できるわけではない。

⑤もうひとつ課題として浮上したのは、17世紀と18世紀における近代派の政治理論の連続性の様態について、である。17世紀においていわゆる古代派（共和主義）を退ける政治理論が人文主義の正統な継承者であったとするならば、18世紀の近代派の政治理論と人文主義の関連をめぐって通説を再検討することが必要となろう。この点については、本研究代表者は、かつてデイヴィッド・ヒュームと人文主義の関連をめぐって一定の結論を導いたが、今回の絶対主義政治理論の分析成果をふまえて広く18世紀の政治理論についてさらなる検討が必要である。

(2)絶対主義政治理論と対抗関係にある政治理論についても、以下のような複数の知見が獲得できた。

①立憲主義や共和主義（さらには暴君放伐論や抵抗権論）など、16-17世紀に絶対主義に対抗した思想潮流のあいだには緊密な相互影響が存在することが明らかになった。それ

は、こうした思想潮流について分析概念を定立する場合には、慎重な方法論が必要であることを意味する。「共和主義」や「立憲主義」の思想系譜の境界線は不明確であって、それら系譜の異動・特質を測定するためには、高度に洗練された概念操作が必要となることが明らかになった。

②絶対主義政治理論との関連については、たしかに一方において、絶対主義が同時代の複数の政治思想の潮流（立憲主義、古来の国制論、共和主義）と対抗関係にあり、具体的な政治状況における両者の政治的対立は鮮明だが、しかし、絶対主義に対抗した政治思想群の相互間のみならず、絶対主義、立憲主義、共和主義の理論的な差異は、抽象的な次元では必ずしも明確ではない、ということが判明した。つまり、例えば、絶対主義と立憲主義は法と政治権力の関係をめぐり理論的に明確に正反対の立場にあったわけではない。

③18世紀の啓蒙思想における絶対主義政治理論の理解や受容をめぐる分析からは、啓蒙思想は、「王のテーゼ」の活用に明らか（ように）絶対主義・主権論の理論的成果を活用するとともに、同時に、社会や文明の歴史的転換を追跡する歴史認識を通じて、絶対主義・主権論の理論的成果を克服ないし発展させたことが明らかになった。

④また、啓蒙思想における絶対主義の理解や受容をめぐる分析を通じては、絶対主義政治理論をめぐる20世紀以降の思想史解釈が歴史的産物であり、それゆえに絶対主義の受容や理解をめぐる通時的な思想史的分析が必要である、との知見が得られた。

(3)本研究では、個々の思想系譜、思想家、テキストをめぐる成果とは別に、方法論的知見も獲得された。

①ホブズ『ビヒモス』『コモンローをめぐる対話』、ヒューム『イングランド史』のテキスト分析のなか、さらには、J. G. A. ポーコックの近年の研究書 (*Barbarism and Religion, 1999-; Political Thought and History, 2009*) を吟味することを通じて、政治思想史研究において歴史叙述のテキストを検討するための観点や方法論について、一定の結論を得た。

これまでヨーロッパ政治思想史研究においては、国内外を問わず、具体的な歴史叙述や歴史書を政治思想の一部門として扱うことについて研究者の関心が低く、またそのための研究方法論も未成熟だった。これまで、政治思想史研究は、主として法学と哲学の概念を援用して行われ、歴史というテーマを扱うにあたって、具体的な歴史叙述ではなく

て、文明史や歴史哲学に関心が集まっていた。しかし、初期近代ヨーロッパ政治思想における人文主義の役割が再評価されたこと、さらには、歴史学において言語論的転回をふまえた歴史叙述をナラティブ（物語り）として捉え直す理論的展開が生じた、という事情を背景にして、歴史叙述をめぐる思想史の個別研究や方法論の蓄積が次第になされてきた。

本研究課題のなかで、暫定的な結論として導かれた方法論的知見は、「政治思想としての歴史叙述」「政治思想における歴史叙述」と表現されるべき方法論的観点であり（これは、初期近代ヨーロッパの政治思想においては具体的な歴史解釈と政治論が密接に関連していた、という認識を前提としている。このことは同時に、人文主義・文献学が単に古代の政治思想の継受にはとどまらない思想史的意味をもっていたことを意味している）、さらには、歴史叙述をヨーロッパの歴史叙述思想史の層のなかで分析する、A. モミリアーノに由来する分析方法論である。

②具体的な分析レベルでは、初期近代の思想家にみられる古代の政治制度・政治思想に対する態度を測定するためには、中世ヨーロッパの政治思想や政治制度に対する当該思想家の評価を吟味する作業が不可欠であること、ならびに、古代政治学の受容の様態を確定するためには、当該思想家が前提とした学説史・思想史をめぐる理解のみならず、古代以来の歴史一般をめぐる理解を解明する必要があることが明確になった。つまり、古代の学説（政治学）をめぐる歴史認識は、当該思想家の歴史認識の総体との関連のなかで理解すべき、との実態が明らかとなった。

(4)本研究課題の成果をふまえた今後の展望については以下の通りにまとめることができる。

①第一は、ホブズ研究における展開である。彼の政治思想については、これまで一般に、非歴史的・反歴史的であるとの性格規定が与えられ、『リヴァイアサン』など三つの政治論に研究が集中してきたが、彼の内乱史叙述、イングランド法史論、古代ギリシア史の翻訳をふまえた再評価が絶対的に必要である。これは、ホブズと人文主義の関連という古典的な研究テーマについて、歴史叙述に着目するアプローチを採用することによって解答を与えることを意味する。

②第二は、初期近代ヨーロッパの政治思想史の再評価作業である。共和主義（政治的人文主義）をめぐる研究の活性化が初期近代の政治思想史の再評価・見直しを促してきたことは確かだが、その後の研究の進展とともに、

自由主義か共和主義か、という対抗図式で初期近代の政治思想史を理解する限界が意識されるようになってきた。政治的人文主義をひとつのヴァージョンとする、むしろ人文主義の多様な影響が明確になった。やはり歴史叙述に焦点をあわせるという手法を通じて、人文主義の影響下にあった初期近代政治思想史の全貌をめぐる特質が解明されることが期待される。

③第三の展望は、具体的な歴史叙述を政治思想として分析するケーススタディを提供することを通じて、「政治思想における歴史叙述」「政治思想としての歴史叙述」をめぐる歴史研究や理論研究の一般的な分析枠組みを提示することである。ここにおいては、歴史解釈と政治論が連動するのは初期近代のヨーロッパに限定された現象ではないことにも留意する必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 犬塚元、「書評 木村俊道『文明の作法—初期近代イングランドにおける政治と社交』、『イギリス哲学研究』第 34 号、71-73、2011、査読無
- ② 犬塚元、「書評 Quentin Skinner, *Hobbes and Republican Liberty*」、『イギリス哲学研究』第 32 号、141-143、2009、査読無
- ③ 犬塚元、「ヒューム『イングランド史』のスコットランド史:1707 年合同をめぐる歴史叙述の政治思想」、『群馬大学社会情報学部研究論集』第 16 巻、83-100、2009、査読有、<http://hdl.handle.net/10087/4762>
- ④ 犬塚元、「書評 Neil McArthur, *David Hume's Political Theory: Law, Commerce, and the Constitution of Government*」、『経済学史研究』、第 50 巻 2 号、97-98、2009、査読無
- ⑤ 犬塚元、「拡散と融解のなかの『家族的類似性』:ポーコック以後の共和主義思想史研究 1975-2007」、『社会思想史研究』第 32 号、54-65、2008、査読無
- ⑥ 犬塚元、「思想史研究としての精度を高めること」、『社会思想史研究』第 32 号、72-73、2008、査読無
- ⑦ 犬塚元、「Book Review J. G. A. ポーコック『マキアヴェリアン・モーメント』」、『論座』2008 年 8 月号、朝日新聞社、

316-317、2008、査読無

- ⑧ 犬塚元、「大陸自然法学の復権のための戦略」、『政治思想研究』第 8 号、風行社、326-327、2008、査読無
- ⑨ 犬塚元、「『啓蒙の物語叙述』の政治思想:ポーコック『野蛮と宗教』とヒューム」、『思想』第 1007 号、108-132、2008、査読無
- ⑩ 池田和央・犬塚元・壽里竜「ヒューム『イングランド史』抄訳 (5) 附録 3 下」、『経済論集』(関西大学)、第 57 巻 2 号、97-119、2007、査読無

[学会発表] (計 5 件)

- ① 犬塚元、「制度・型・作法:木村俊道『文明の作法—初期近代イングランドにおける政治と社交』(2010)を読む」、社会思想史学会第 35 回大会、2010.10.24、神奈川大学
- ② INUZUKA Hajime, 'Struggle for Patriotism without Nationalism in Japan: The Case of Maruyama Masao', International Symposium 'Patriotism without Nationalism in the East Asian Context' held by the East Asia Institute, 2010.10.15, Korea University: Seoul, Korea
- ③ 犬塚元、「歴史/歴史叙述のなかの伝統と革命」、第 8 回韓国・日本政治思想学会国際学術会議、2009.07.05、立教大学
- ④ 犬塚元、「スコットランド史解釈と 1707 年:ヒュームの歴史書はなぜ『イングランド史』になったか」、日本イギリス哲学会第 32 回研究大会、シンポジウム I、2008.03.27、帝京大学

[図書] (計 4 件)

- ① ダンカン・フォーブズ、『ヒュームの哲学的政治学』(田中秀夫監訳、犬塚元ほか訳) 昭和堂、307-420、2011
- ② 犬塚元、「立憲主義」、今村仁司・三島憲一・川崎修編『岩波社会思想事典』、岩波書店、323-326、2008
- ③ 岡崎晴輝・木村俊道編、『はじめて学ぶ政治学』(犬塚元ほか執筆)、ミネルヴァ書房、299-310、2008
- ④ 犬塚元、「混合政体論」、イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想事典』、研究社、187-189、2007

[その他]

ホームページ

<http://www.law.tohoku.ac.jp/~inuzuka/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

犬塚 元 (INUZUKA HAJIME)

東北大学・大学院法学研究科・准教授

研究者番号：30313224

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし